

中年期女性教師における教職生活の語り研究

－養育と教育の重ね合わせに着目して－

Narrative Research on the Life of Middle-aged Female Teachers : Focusing on the Connection between Nurturing and Teaching

山田 真利子 (Mariko Yamada) 指導：菅野 純

【問題の所在と目的】

中年期はアイデンティティの問い直しを求められる時期であり（岡本，1985），教師のライフサイクル研究においても最も重要な時期の1つとして指摘されている（高井良，1994）。また女性教師においては，養育と学校の教育を重ね合わせることで，子育てが特権的な経験として教師の仕事に生かされることが示唆されているが，その過程で葛藤と変容を経験していることも指摘されている（浅井，2006）。以上より中年期女性教師は発達ライフサイクルおよび教員のライフステージという二重の危機に直面しており，また養育と教育の重ね合わせによって生じる課題が，危機をより複雑なものにしていることが考えられる。そこで本研究では，中年期女性教師を対象に，養育と教育の重ね合わせの部分に着目したインタビューを行い，女性教師特有の困難を探りながら教職生活および家庭生活における多様な役割をどのようにすり合わせ中年期危機を乗り越えていくかについて分析・考察を行うことを目的とする。

【方法】

対象者：関東圏内在住の中年期女性教師 5 名（子育て経験有）を対象とした。

調査方法：200X 年 8 月に，半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。その際には，初任期から現在までの，教職生活，家庭生活および個人としての自分自身に関する 3 つの軸における転機（turning point）に注目しながら，意識の変化や他の出来事との関連について語ってもらった。

分析方法：逐語録のコーディングを行い概念を生成し，その概念をカテゴリー，サブカテゴリーに集約した。その上で，5 事例における共通性を探るため，概念間の関連を検討し，概念同士を結びつけている上位概念を抽出した。またさらに，上位概念同士をまとめるものがあれば，それを集合上位概念として抽出した。

【結果と考察】

概念・カテゴリー内容の結果と考察

対象者ごとに，55～94 個の概念が生成され，それぞれ 15～18 個のサブカテゴリーおよび 5～8 個のカテゴリーに集約された。これにより，対象者が各生活場面においてどのようなライフイベントを経て，また何を重要視しているかが示された。

上位概念の抽出と各概念間における関係の検討

対象者ごとに 5～9 個の集合上位概念および上位概念が抽出された。集合上位概念および上位概念からは，対象者の姿勢や思考傾向を表すものが得られ，それを通し，各対象者の教職生活および家庭生活の両立のあり方を検討した。また，5 事例における共通性としては，以下の 4 点が浮かび上がり，順に考察を行った。

1) ワーク・ライフ・バランス

仕事と子育てというバランスに加えて，教職と子育ての関連が認められた。その中で，自分自身が何に比重を置いており，またどのようなバランスを望んでいるのかについて自覚的であることが重要であると考えられた。

2) 時期・時代性における変化

教師としての自分自身を振り返り見つめ直す中で，同時に家庭生活における自身も重ね合わせて振り返る契機となることが示唆された。これらのことは，教師，母親の両者の役割意識が同時に揺らぎ易いことにもつながり，そのことが自身の内的変化への衝撃を強める一方，アイデンティティの再体制化のプロセスへと向かう機会を得やすくしているとも考えられた。

3) 自分自身の承認

ワーク・ライフ・バランスの承認につながる他者から認められることが，自分自身のこれまでの生き方を承認し，これからの自分へ目を向けていく一因となることが示唆された。

4) ステレオタイプ教師観

教職と子育ての間の役割移動に伴い生じる葛藤や苦しみに対処する方略として，教師に特有の原因帰属を行う姿が確認され，本研究ではこれをステレオタイプ教師観と名付けた。

【総合考察】

上記の 4 点をまとめ，中年期女性教師のアイデンティティ再体制化の過程において重要であると考えられたものについて検討した。本研究では，ワーク・ライフ・バランスを含んだ，これまで確立してきた生き方や自分自身の思考傾向をもう一度見つめ，それに対しどのように意味づけを行い，どのように自分自身のあり方を承認し，これからの自分へと目を向けていくかが重要であることが示唆された。